

ロンドンでの研究生活

ロンドン大学パークベックカレッジ 認知・脳機能発達センター リサーチフェロー

千住 淳 (せんじゅう あつし)

私は、2005年5月に、リーパーヒューム財団の助成による10ヵ月間の客員リサーチフェローとしてロンドン大学パークベックカレッジ、認知・脳機能発達センター(Centre for Brain and Cognitive Development : CBCD)に着任しました。その後、CBCDの居心地があまりに良いので、気がつくと現在まで、8年近く居着いてしまいました。

パークベックカレッジは、ロンドンの中心部、大学や研究所が集まるブルームズベリー地区の一角に位置しています。近くにはユニバーシティカレッジ(UCL)を始め、心理学や脳科学に特化した大学や研究所も数多くあり、セミナーや研究会などにも気軽に参加することができます。CBCDは2007年に新築された研究棟の大部分を占めており、実験室やセミナー室、オフィスなどが一つの建物に集まっています。実験室は地下のワンフロアを占めており、脳波計やNIRS、アイトラッカーや行動観察室など、乳幼児の認知研究、脳機能研究に必要な最先端の機器が、六つある乳児実験室にそれぞれ備え付けられています。

CBCDでは、センター長のマーク・ジョンソン教授を中心とした20名前後のファカルティや研究スタッフ、20名程度の研究支援スタッフやインターン、さらには数十名の大学院生が、日々研究に勤しんでいます。特に、経験豊富で優れた研究支援スタッフによる支援態勢が整っているため、実験機器の管理や研究に参加する赤

ちゃんのリクルート、スケジュールリングなどもスムーズに行うことができます。私がロンドンに来た当初、英語がまだおぼつかない頃には、親御さんへの実験内容の説明など、研究支援スタッフには本当にお世話になりました。

それと、イギリスは自然科学に対する理解や親しみがとても強い国であるように思われます。例えば、日本では赤ちゃん研究の参加者を集めることは必ずしも容易ではないのですが、イギリスでは本当に数多くの親御さんが、積極的に実験に参加して下さいます。これは、もともとイギリスはボランティアが盛んな文化であるということもあるのですが、「研究」や「実験」というものに対する親しみや関心が強いことも背景にあるような気がします。ニュートンやダーウィンを生みだした伝統のなせる技なのか、BBCを始めとした優れた科学ジャーナリズムの恩恵を受けているのか、科学者の端くれとしてはとてもありがたい環境です。

もちろん、イギリスでの研究生活も良いことばかりではありません。特に、事務手続きの遅さと雑さには、いつも頭を抱えます。締切よりずっと前に提出していた書類がなぜか処理されていなかったり、メールの返事がいつまでも返ってこなかったりすることもよくあります。大学の事務に限らず、ビザの手続きにしても、銀行口座の開設にしても、家借りるのにしても、とにかくイギリスでは日本より遙かに長い時間がかかりま



Profile — 千住 淳

2005年、東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了。同年より、ロンドン大学パークベック校の認知・脳機能発達センターで研究員として着任。博士(学術)。著書は『社会脳とは何か』(新潮新書)、『社会脳の発達』(東京大学出版会)、『ソーシャルブレインズ』(分担執筆、東京大学出版会)など。

す。イギリスに留学を考えておられる方は、できるだけ早いうちから手続きを始められることをお勧めします。

一昨年から5年間、私は英国医学研究会議(Medical Research Council)から大型の研究助成を受け、社会脳の自発性に関する研究を進めています。これまでロンドンでは(支援を受けながらも)主に一人で研究を行ってききましたが、今回の研究助成や、それ以外の研究助成を受けて、リサーチアシスタントや博士課程の大学院生など数名を私の研究プロジェクトに迎えることができ、少しずつですが小さなチームとしての研究活動ができるようになってきました。快適な環境で研究に専念できるありがたさをかみしめつつ、もうしばらくは、ロンドンの居心地の良さを楽しもうと思っています。